

「日本人は黒髪」時代の終わり

前田 正子^{*}

< 増え続けるカラーリング比率 >

2002年に日韓共同開催で実施されたサッカーワールドカップ。日本人の髪の色といえば「黒」に決まっていたものだが、日本人選手団の髪の色は茶色どころか、赤あり、金色ありとそれこそ色とりどり。しかも、日本のシンボルカラーはジャパンプルーだったため、応援団席もカラスプレーで青く髪を染めた一団が目立った。

実際、髪を染める人は増え続けている。日本石鹼洗剤工業会が、女子高校生と20代サラリーマン・OL各100名に1992年から4回にわたって、髪のカラーリング（染めているかどうか）について聞いている。結果を図表1に示したが、カラーリングしている人の比率は調査開始以来上がり続け、2001年にその比率は女子高生の41%、20代OLの85%、20代サラリーマンでも33%にもなっている。つまり、20代OLでは、髪を染めていない「緑の黒髪」の持ち主はわずか6人に1人にすぎない。

< 黒髪はダサイ？ >

さらに、同じ調査では「なぜカラーリングするのか」という質問をしているが、サラリーマンの約6割、OLの約8割が「髪が黒いと重く見えるから」を挙げている。もはや黒髪は「ダサイ」ものなのだろうか。また、次に多いのが「自分の雰囲気やイメージを変えたいから」や「ヘアのおしゃれを楽しみたいから」であり、「髪の色を変える」のが、おしゃれのひとつになっていることがうかがわれる。

カラーリングの伸びは、染毛料の出荷額からも裏付けられる。図表2に「化粧品出荷統計」から出荷額の伸び率を載せてみた。これは1996年度から2001年度までのものだが、化粧品合計や頭髪用化粧品が伸び悩んでいる中で、染毛料はその出荷額を伸ばしている。染毛料は2001年度には出荷額約1,114億円に上っているが、細かく分類された化粧品の中で、これを上回る出荷額を誇るのは、ファンデーションと化粧水、美容液しかない。染毛料は化粧品業界では第4位の売り上げを示す、大きな商品なのだ。

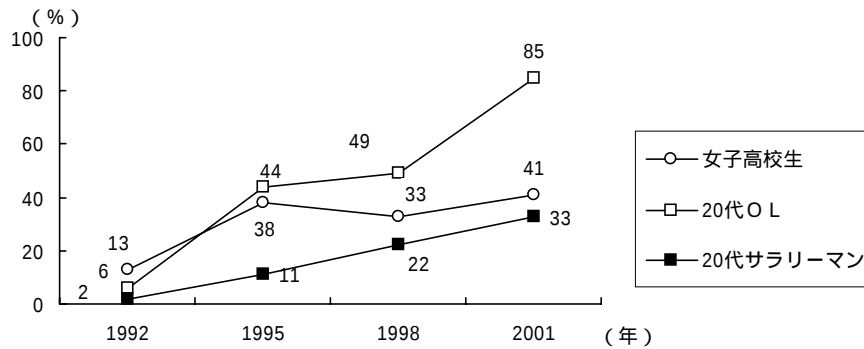
< 茶髪は似合えばよい >

「髪の色」について1997年に調査を実施したポーラ文化研究所は、「もはや黒は日本人の髪の特徴ではなく、黒は選択肢のひとつに過ぎない」と結論づけている。また同研究所では、各年代の女性を対象に1997年と2000年に調査を実施し、「茶髪は似合えばやってもよい」と思う人の比率を出している（図表3）。これをみると、2000年には高校生から40代前半までは、90%以上の人が「やってもよい」と思っている。年代を追うごとにその比率は下がるものの、1997年に比べ2000年には茶髪を受け入れる人が、増加していることが分かる。年配者においても、茶髪への抵抗感がなくなっている。

さて、4月といえば新入社員の季節だが、あなたの職場の新入社員の髪の色は何色だろうか。

^{*}前 研究開発部主任研究員
現 横浜市副市長

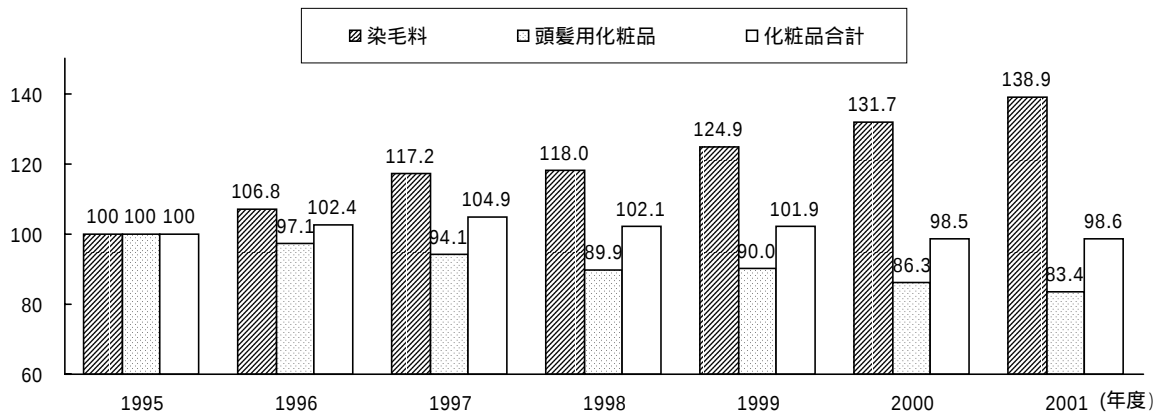
図表1 カラーリングを「現在している」比率



注：女子高校生・20代OL・20代サラリーマン各100名が回答。

資料：日本石鹼洗剤工業会「第44回クリーン調査女子高校生、20代サラリーマン、20代OLのヘアケア/ヘアカラーに関する調査」2002年。

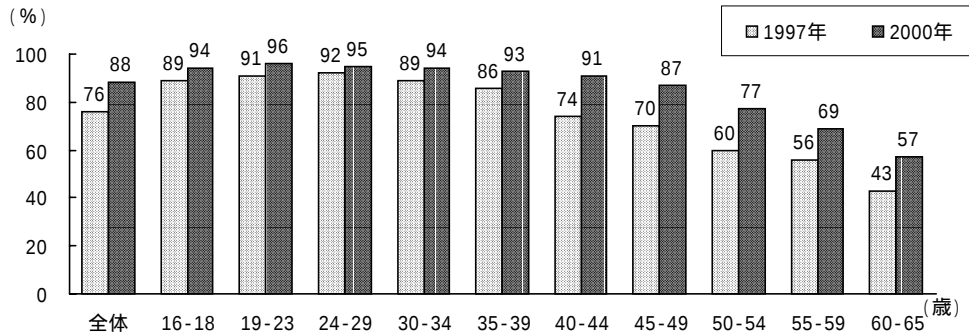
図表2 染毛料・頭髪用化粧品・化粧品合計各出荷額(指数)の推移



注：1995年度の出荷額を100として、その後の伸び率より試算。

資料：経済産業省「化粧品出荷統計」

図表3 「茶髪は似合えばやってもよい」と思う人の比率



注：各年代ごとに70名の女性の回答だが、24-29、30-34歳は未婚者・既婚者各70名ずつの140名回答。

資料：ポーラ文化研究所「アンケートに見る過去10年間の現代女性の髪色観の変化」2001年。